

養護教諭にかかわる実態調査(令和4年度)

I 調査目的

静岡県養護教諭研究会会員の実態をはじめ、養護教諭を取り巻く環境や児童生徒等の保健室利用状況の実態を把握し、課題解決に向けて養護教諭の役割を明らかにするとともに、児童生徒の心身の健康づくりの推進を図ることを目的とする。

II 調査方法・調査対象者数

- 1 対象 静岡県養護教諭研究会会員
- 2 調査日 令和5年3月
- 3 方法 エクセルファイルによるパソコン入力
- 4 調査内容
 - ① 年齢・経験年数
 - ② 免許取得及び保健主事任用状況
 - ③ 養護教諭を取り巻く環境に関する調査
 - ④ 保健室・別室登校及びいじめ・虐待などの保健室利用に関する調査
 - ⑤ 危機管理に関する調査(研修、熱中症、食物アレルギー、新型コロナウイルス感染症対策)
 - ⑥ 複数配置・資質の向上に関する調査

表1 実態調査対象者数と有効回答数

単位：人

	静 東		静 西		静 岡		浜 松		小学 校	中学 校	特別 支援 学校	全体
	小	中	小	中	小	中	小	中				
調査対象者数	176	92	149	70	87	41	112	51	524	254	1	778
有効回答数	176	92	149	70	87	41	112	51	524	254	1	778
有効回答率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表2 実態調査対象校数と有効回答数

単位：校

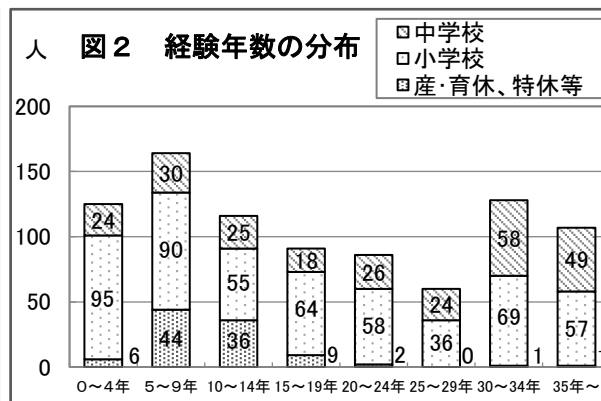
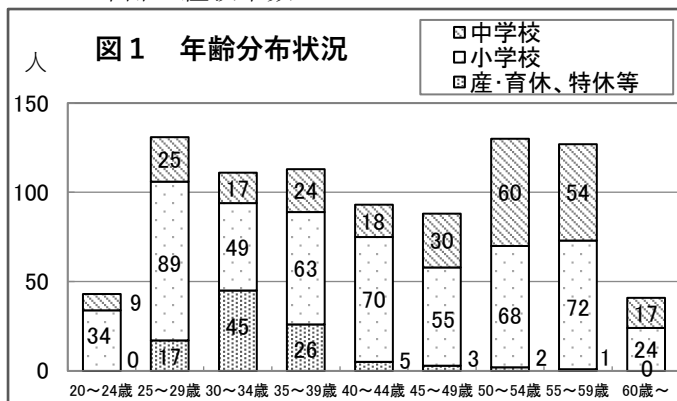
	静 東		静 西		静 岡		浜 松		小学 校	中学 校	全体
	小	中	小	中	小	中	小	中			
調査対象校数	168	98	142	67	85	46	97	49	492	260	752
有効回答数	168	98	142	67	85	46	97	49	492	260	752
有効回答率(%)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

複数配置校の養護教諭は、調査内容の①と②の免許取得状況のみ全員が回答している。

III 調査結果

第1章 養護教諭基本調査

1 年齢・経験年数



平均年齢 42.1歳
(小) 40.6歳 (中) 45.3歳

平均経験年数 18.2年
(小) 16.6年 (中) 21.8年

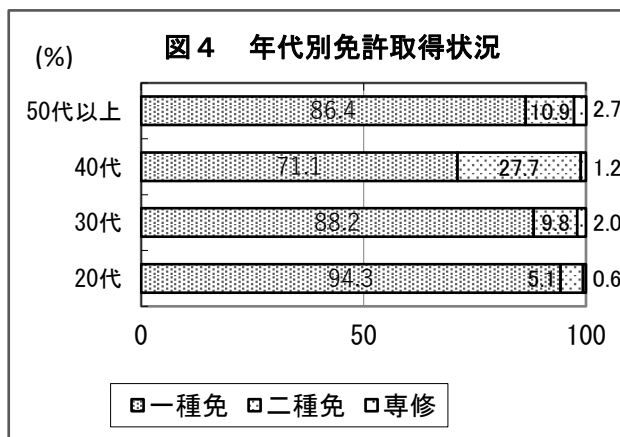
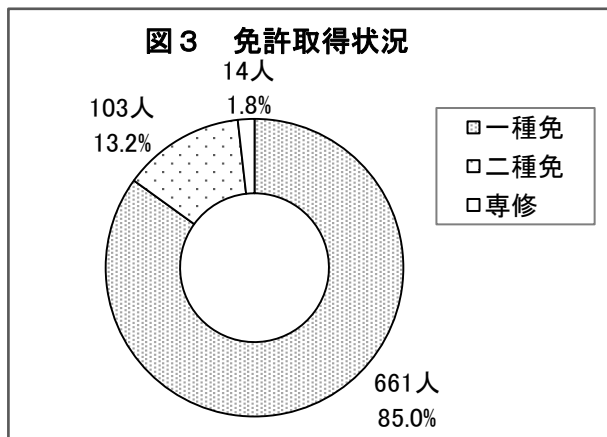
年齢分布をみると、50代以上が298人で最も多く、次いで30代が224人、40代が181人、20代が174人となっている。また、産・育休、特休等の取得中の人数は全体で99人で、そのうち71人が30代であった。

経験年数は、小学校は4年以下が95人と最も多く、中学校では25年以上のベテランの配置率が51.6%と半数近くを占めている。〈図1、図2〉

養護教諭の平均年齢は、中学校の方が4.7歳高く、経験年数も5.2年長い。

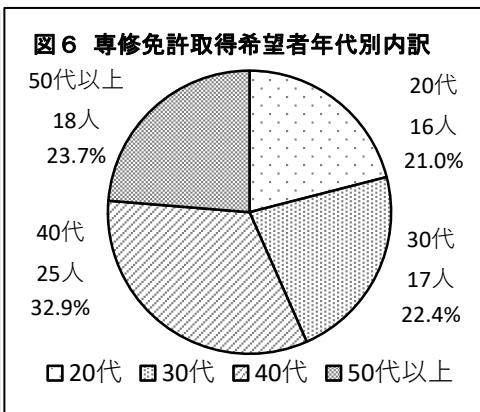
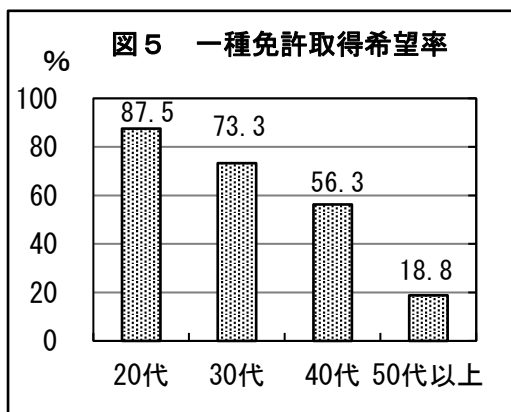
2 免許取得及び保健主事任用状況

(1) 免許取得状況



会員全体の免許取得状況は、一種免許661人（85%）、二種免許103人（13.2%）、専修免許14人（1.8%）となっている。

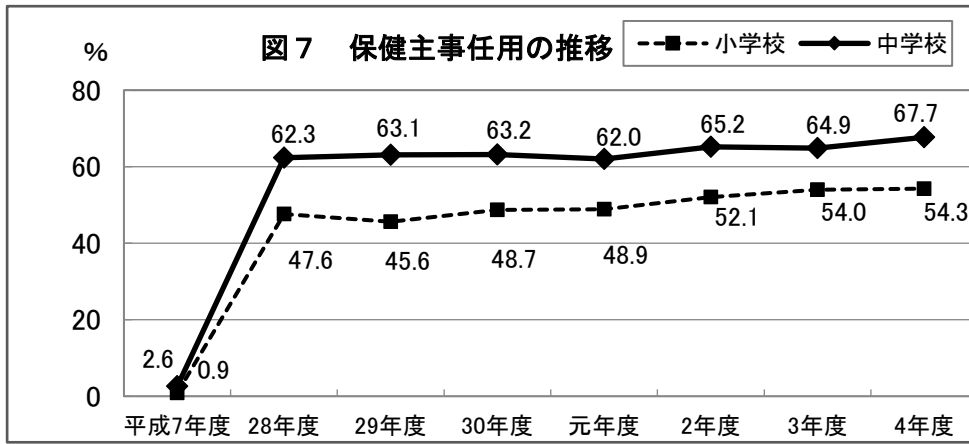
一種免許取得者はこの24年間で大幅に増えている。また、年代別免許取得状況では、50代以上で専修免許取得者の割合が高い。〈図3、図4〉



一種免許取得希望率は20代から30代が、70%以上であった。また、専修免許取得希望率は、40代が32.9%、次いで50代が23.7%であった。40代の養護教諭がより高度な専門教育望んでいる傾向がみられる。

〈図5、図6〉

(2) 保健主事任用率



保健主事に任用された養護教諭は、小学校での54.3%、中学校は67.7%であり、中学校の方が任用率が高い。

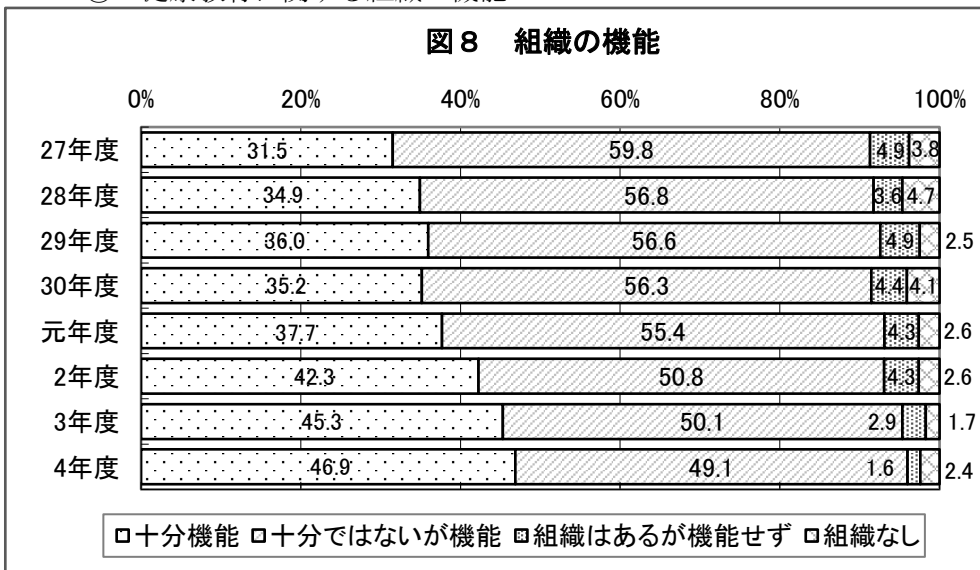
<図7>

第2章 学校基本調査

1 養護教諭を取り巻く環境に関する調査

(1) 健康教育の校内組織体制

① 健康教育に関する組織の機能

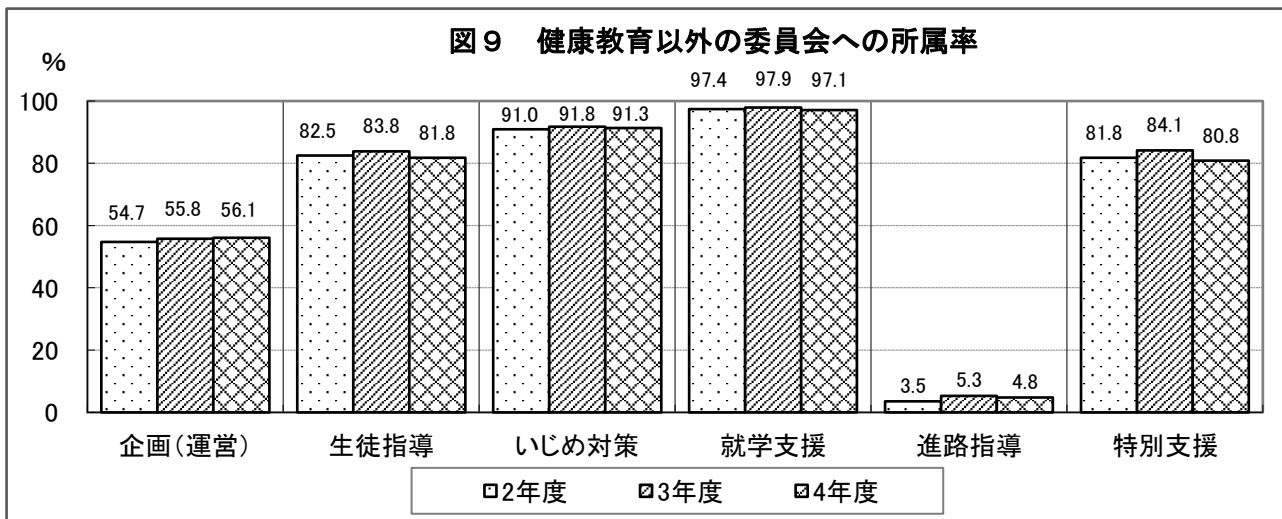


組織として「十分機能」「十分ではないが機能」を合わせると、96%であった。3年度より「十分機能」が増加し、ここ数年の校内体制は充実している。

「組織なし」は、2.4%であった。

<図8>

② 健康教育に関する委員会以外の所属率

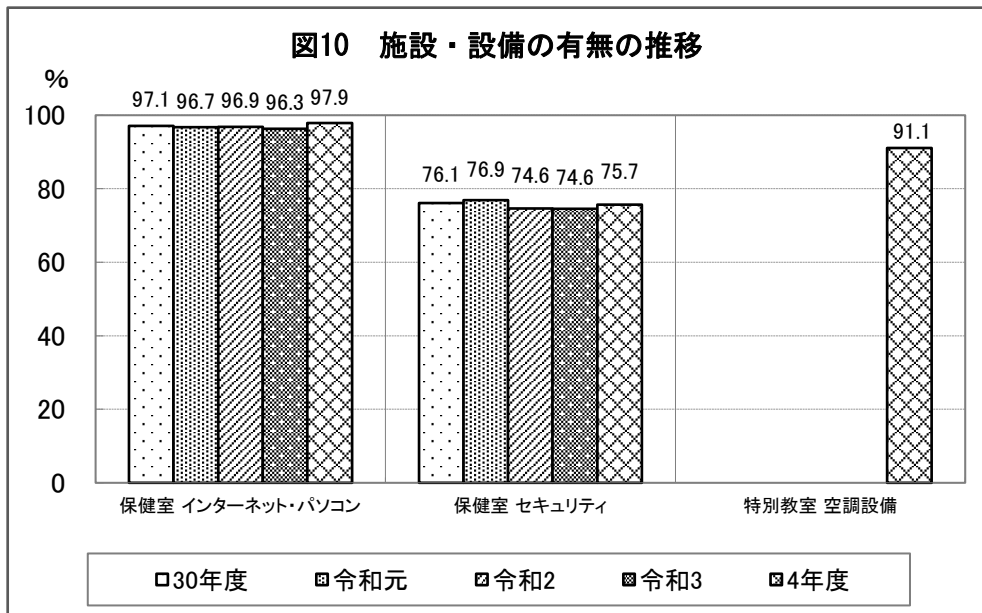


「就学支援委員会」への所属率が97.1%と最も高く、「生徒指導委員会」「いじめ対策委員会」「特別支援委員会」は、80%以上の所属率である。「進路指導委員会」への所属率は低い。

<図9>

(2) 保健室及び校内の施設・設備

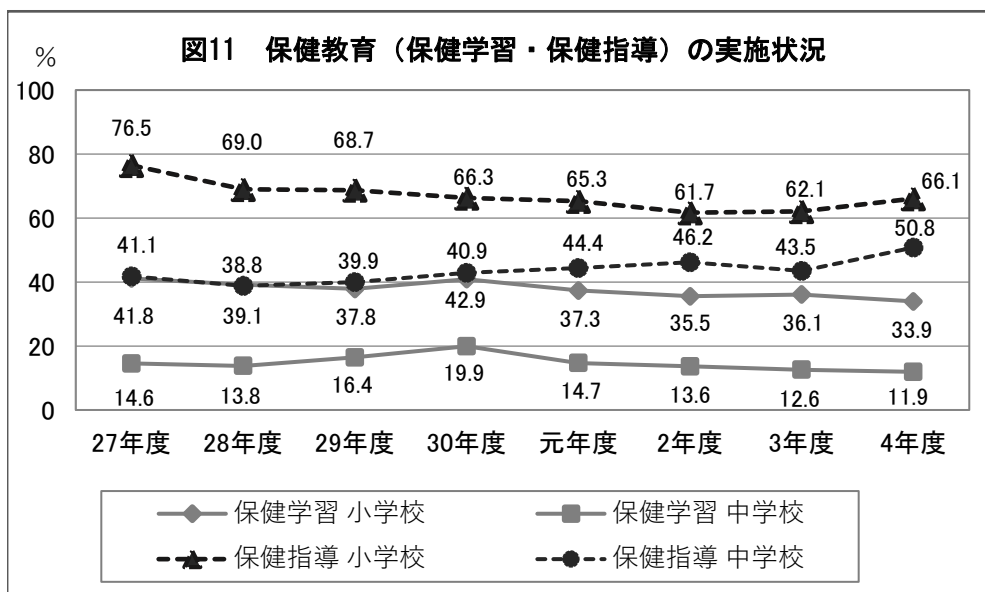
① 施設・設備の有無の推移



施設設備については年々充実しており、横ばい傾向にある。
今年度より、特別教室の空調設備について調査を開始し、設置率は91.1%であった。

<図10>

(3) 保健教育（保健学習・保健指導）の実施状況



養護教諭が教科保健（保健学習）を実施している学校の割合は、小学校33.9%、中学校11.9%であった。

学級活動や総合的な学習の時間における保健指導の実施率は、小学校が66.1%、中学校が50.8%であった。

<図11>

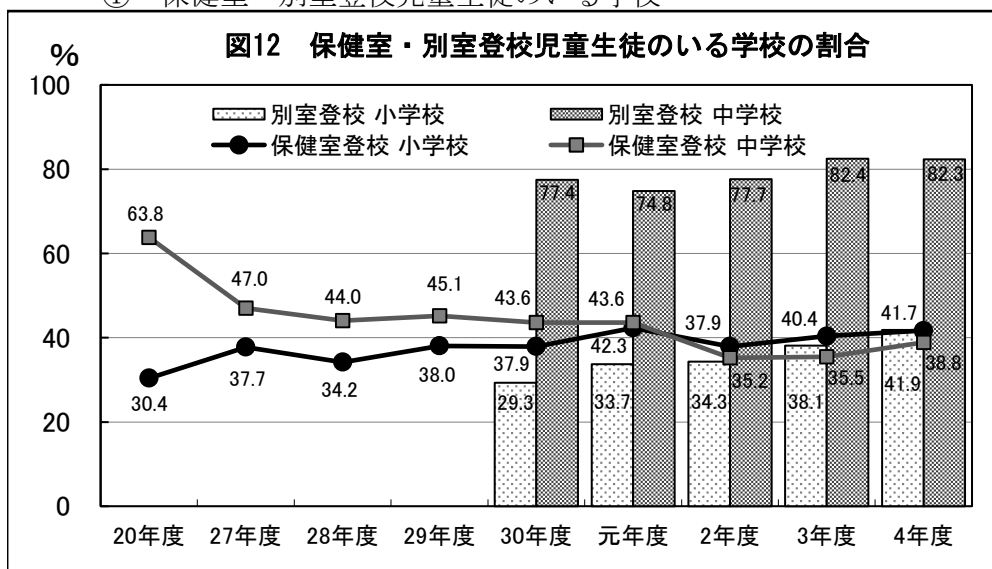
2 保健室・別室登校及びいじめ・虐待など保健室利用に関する調査

(1) 保健室・別室登校の実態

- ※ 保健室登校：常時保健室にいるか、特定の授業には出席できても、学校の間は主に保健室にいる状態。保健室に隣接する部屋にいて、養護教諭が主に対応している場合も含む。
- ※ 別室登校：常時別室にいるか、特定の授業には出席できても、学校の間は主に別室にいる状態。養護教諭以外の職員が主に対応している。
- ※ 保健室登校児童生徒数が多かった20年度の値を、比較のため残している。

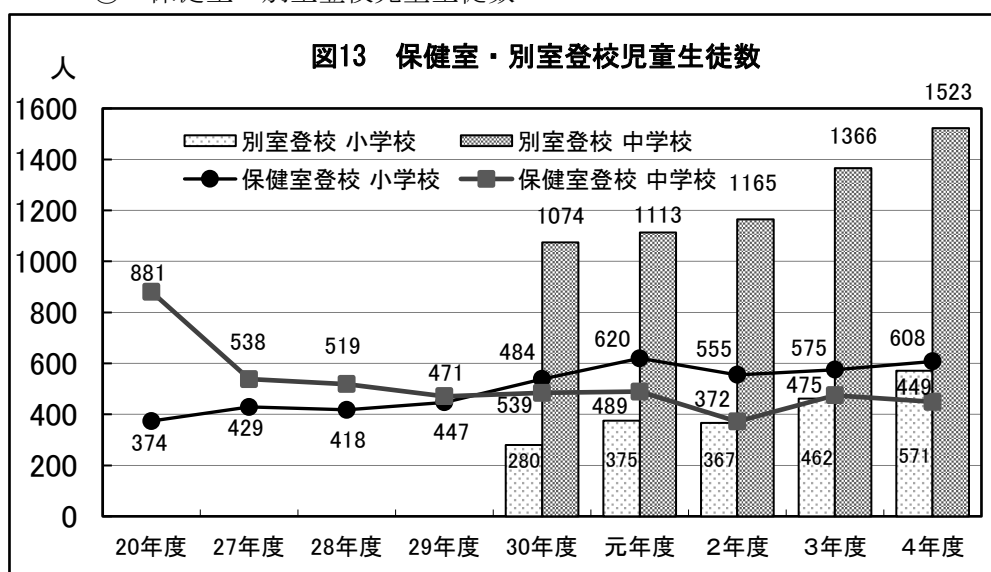
<図12、図13>

① 保健室・別室登校児童生徒のいる学校



保健室登校児童生徒のいる学校の割合は、3年度と比べ、小・中学校共に増加している。別室登校児童生徒のいる学校の割合は、中学校で減少傾向がみられた。〈図12〉

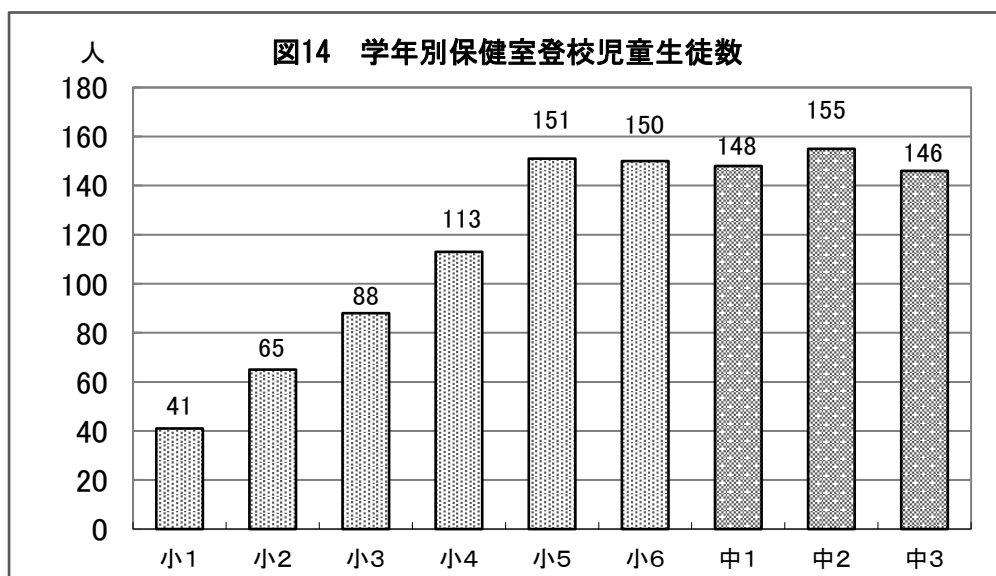
② 保健室・別室登校児童生徒数



保健室登校児童生徒数は、3年度に比べ小学校は33人増加し、中学生は26人減少した。

別室登校児童生徒数は、3年度と比べ小学校109人、中学校157人増加した。また、中学校は別室登校生徒数が、小学校より2.7倍多い。別室や保健室など、教室以外で過ごしている児童生徒が多くいることが分かる。

〈図13〉

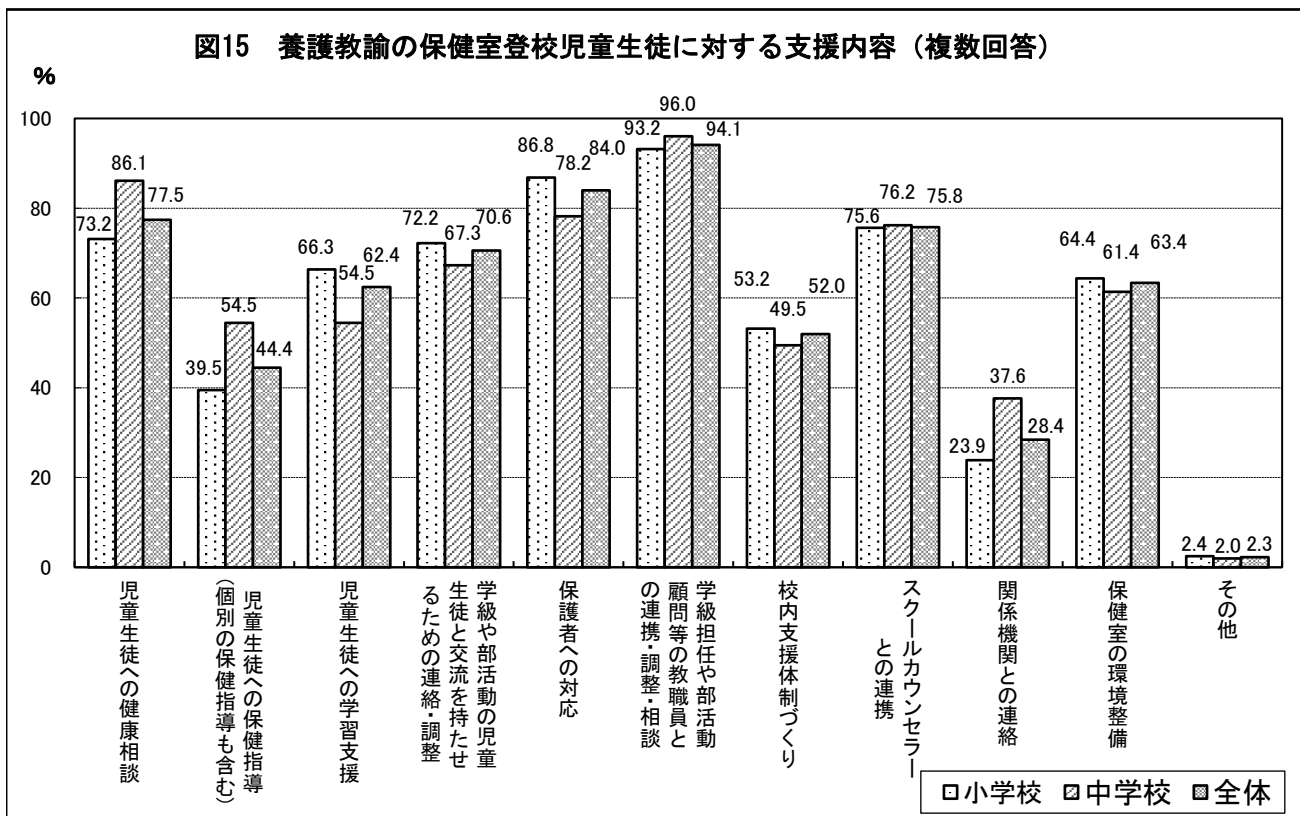


保健室登校児童生徒数を学年別にみると、小学校5年生から急増し、その後、横ばいになっている。中学校では2年生が最も多い。

〈図14〉

③ 保健室登校児童生徒に対する支援内容

図15 養護教諭の保健室登校児童生徒に対する支援内容（複数回答）

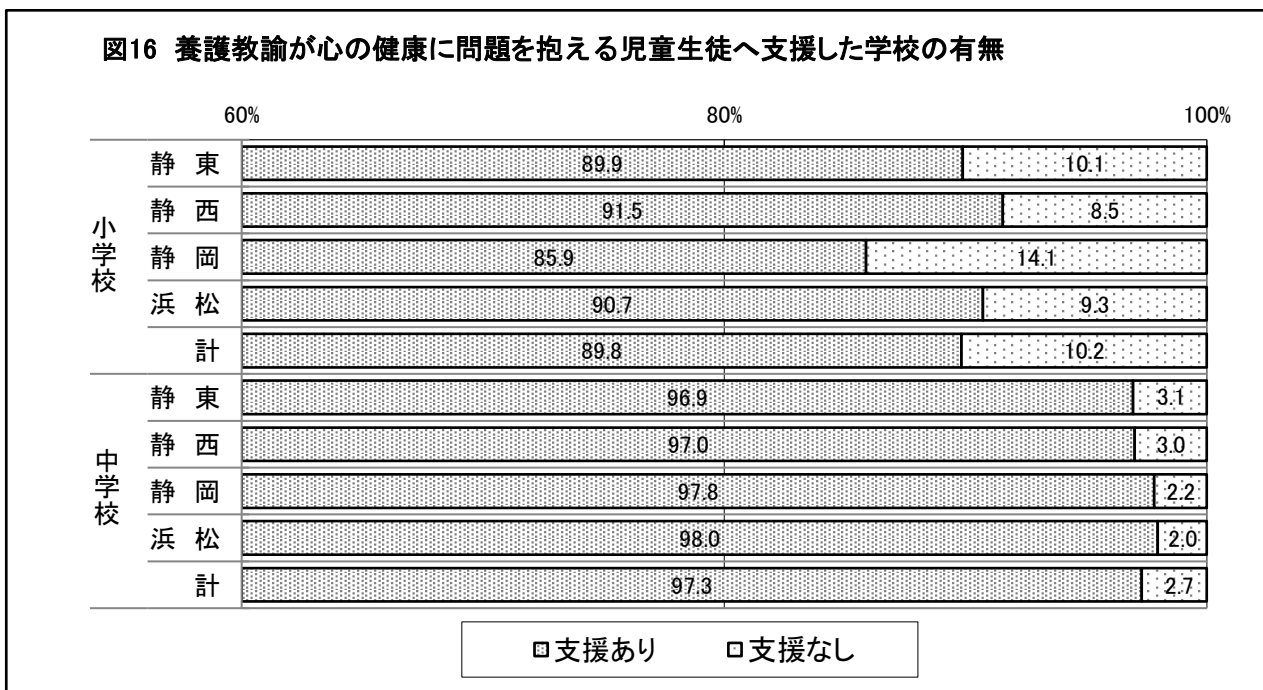


保健室登校児童生徒に対する支援内容は、「学級担任や部活動顧問等の教職員との連携・調整・相談」が、小・中学校共に90%を超えている。〈図15〉

(2) 養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒への支援の実態（保健室登校以外）

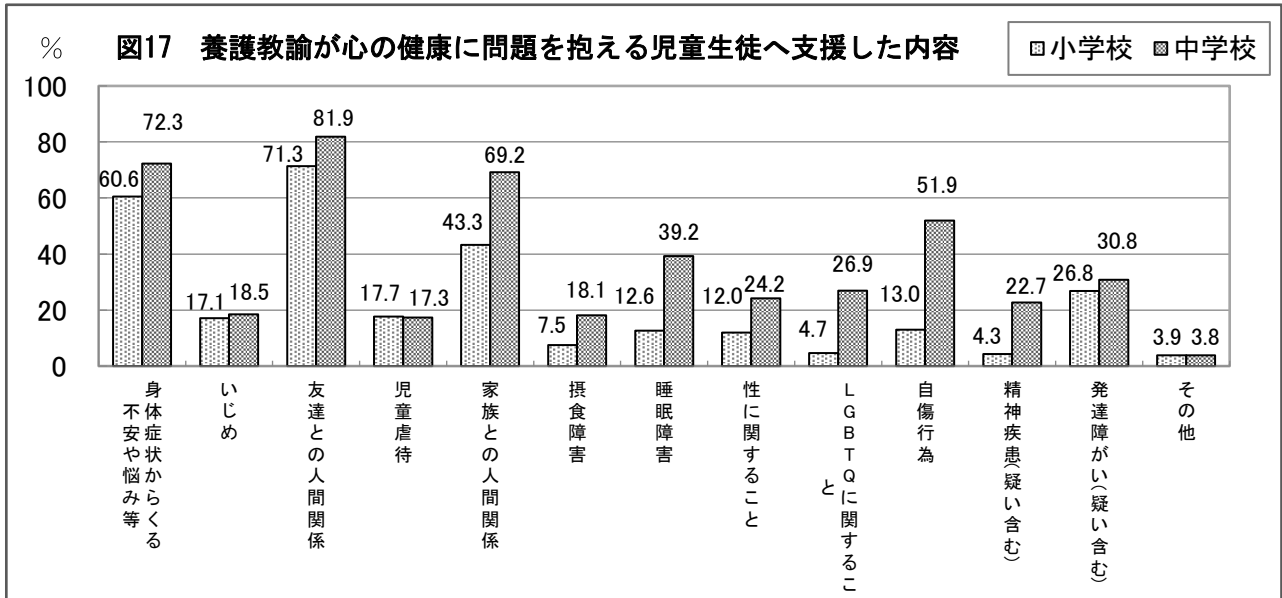
① 養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒へ支援した学校の有無（保健室登校以外）

図16 養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒へ支援した学校の有無



養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒へ支援した学校の割合は、すべての地区において、小学校より中学校の方が高い。全体では、小学校が89.8%、中学校が97.3%の高い割合となっている。〈図16〉

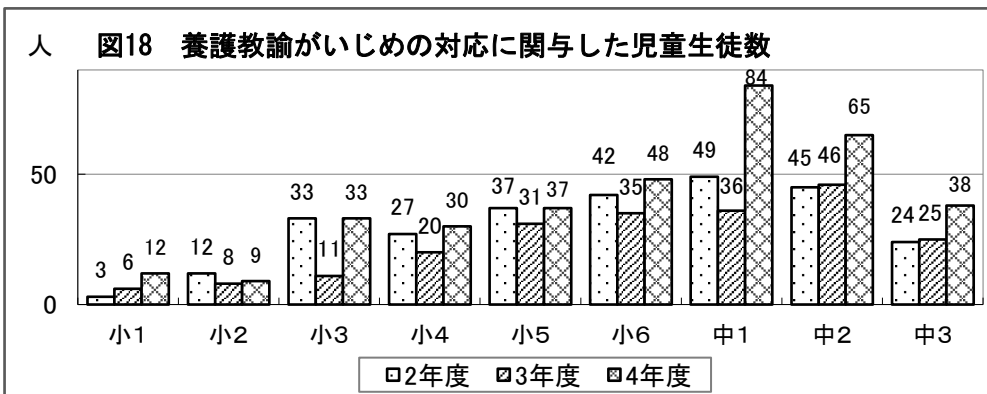
② 養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒へ支援した内容（保健室登校以外）



養護教諭が心の健康に問題を抱える児童生徒へ支援した内容の割合は、全体的に小学校より中学校の方が多。支援の内容として、小・中学校共に「友達との人間関係」「身体症状からくる不安や悩み等」が多かった。また、中学校では「家族との人間関係」「自傷行為」が50%を超え、「睡眠障害」「発達障がい(疑い含む)」も30%を超えている。<図17>

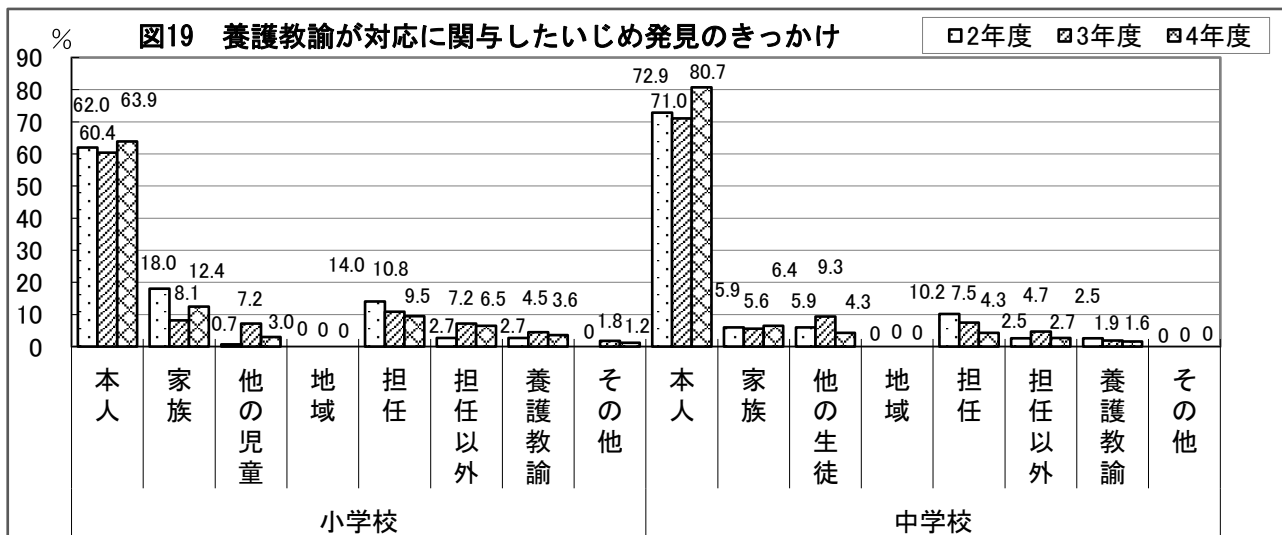
(3) 養護教諭が対応に関与したいじめの実態

① 養護教諭がいじめの対応に関与した児童生徒数



養護教諭がいじめの対応に関与した児童生徒数は、小・中学校共に3年度に比べ増加している。また、小学校では6年生、中学校では1年生が多い傾向にある。<図18>

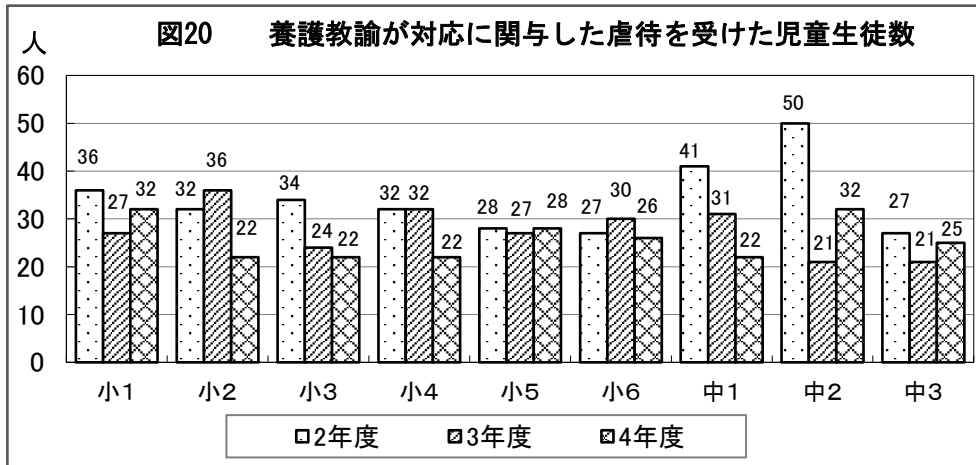
② 養護教諭が対応に関与したいじめ発見のきっかけ



いじめ発見のきっかけは、小・中学校共に「本人からの相談」が最も多い。「家族からの相談」が増加している一方、「他の児童生徒からの相談」「担任からの相談」は減少している。<図19>

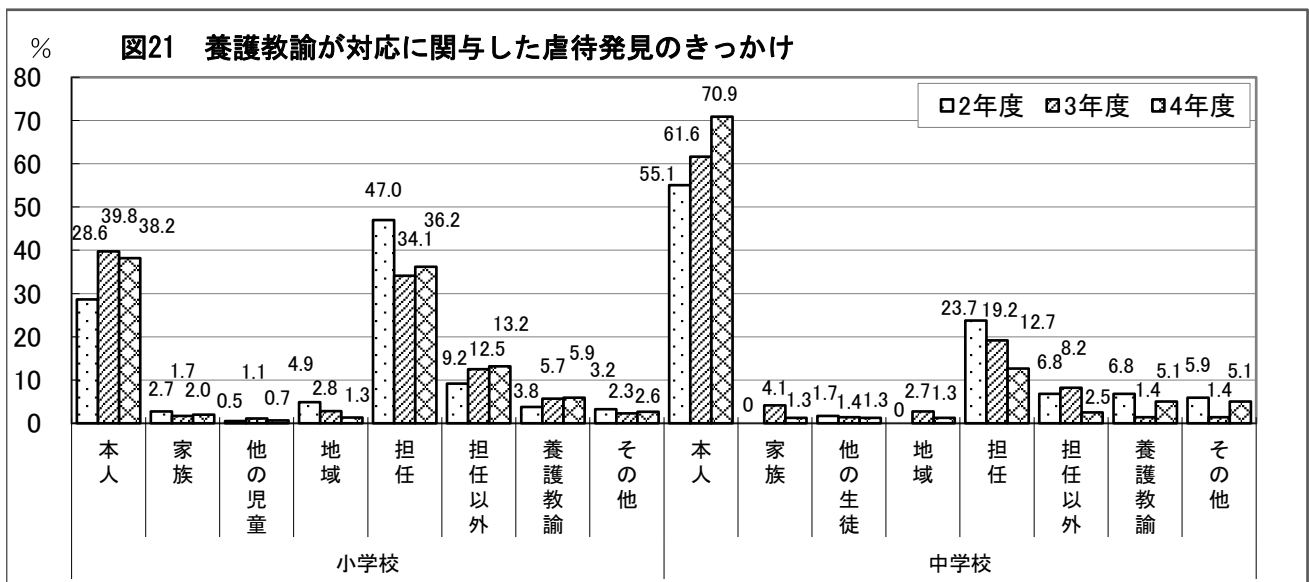
(4) 養護教諭が対応に関与した虐待を受けた児童生徒の実態

① 養護教諭が対応に関与した虐待を受けた児童生徒数



養護教諭が虐待の対応に関与した児童生徒の人数は、小学校で152人、中学校で79人であった。3年度と比べ、4年度は小学校では減少したが、中学校では増加した。学年別にみると、小学校では小1、小5以外は減少している。中学校では、中1以外で増加した。<図20>

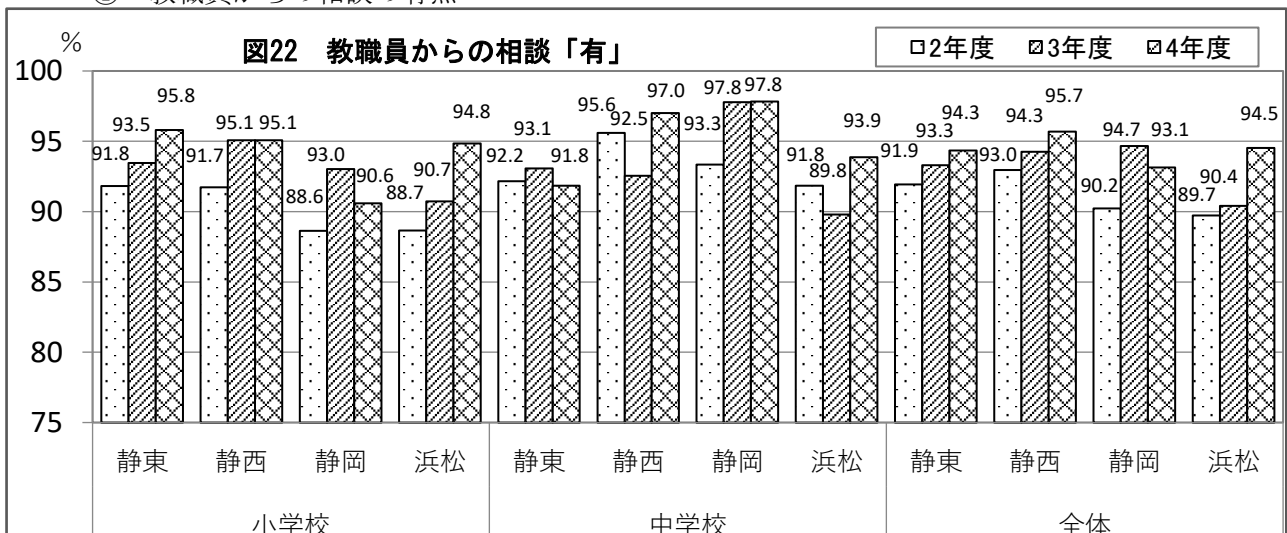
② 養護教諭が対応に関与した虐待発見のきっかけ



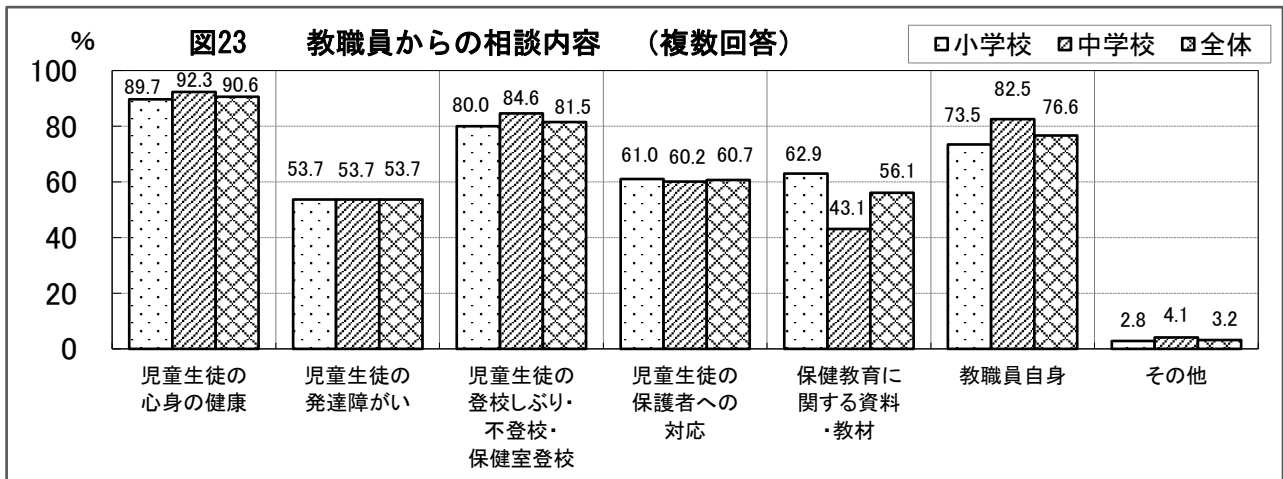
養護教諭が対応に関与した虐待発見のきっかけは、小・中学校共に「本人からの相談」が最も多く、次いで「担任からの相談」の順である。<図21>

(5) 教職員の保健室利用の実態

① 教職員からの相談の有無



② 教職員からの相談内容

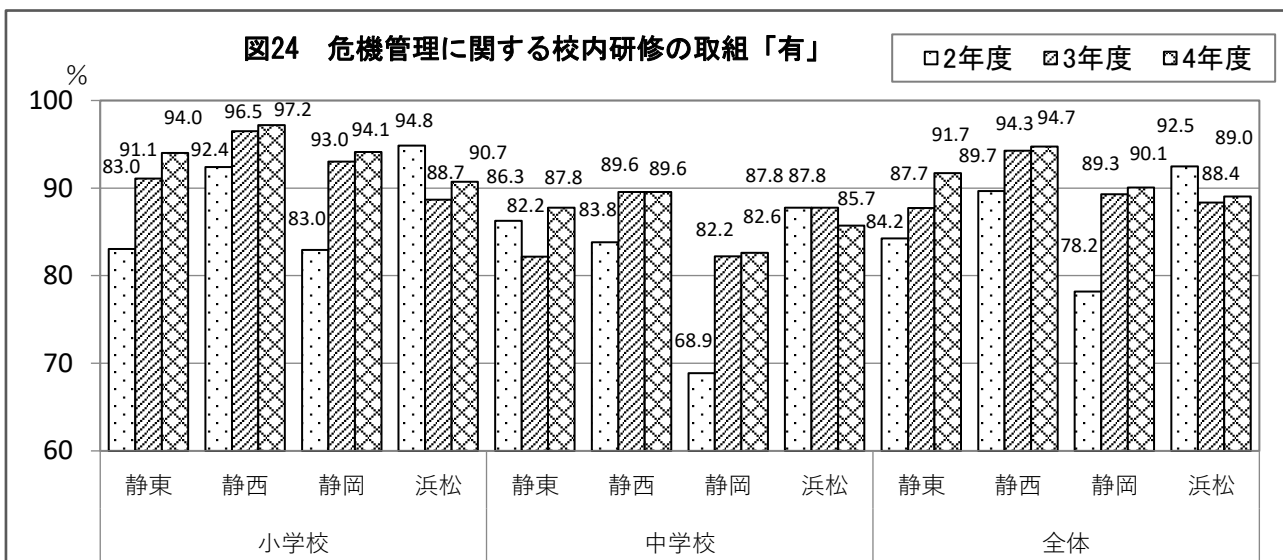


教職員からの相談は、「児童生徒の心身の健康」が最も多く、次いで「児童生徒の登校しぶり・不登校・保健室登校」であった。「保健教育に関する資料・教材」の相談は、他の相談内容に比べ小学校と中学校で差が見られる。＜図22、図23＞

3 危機管理に関する調査（研修、熱中症、食物アレルギー）

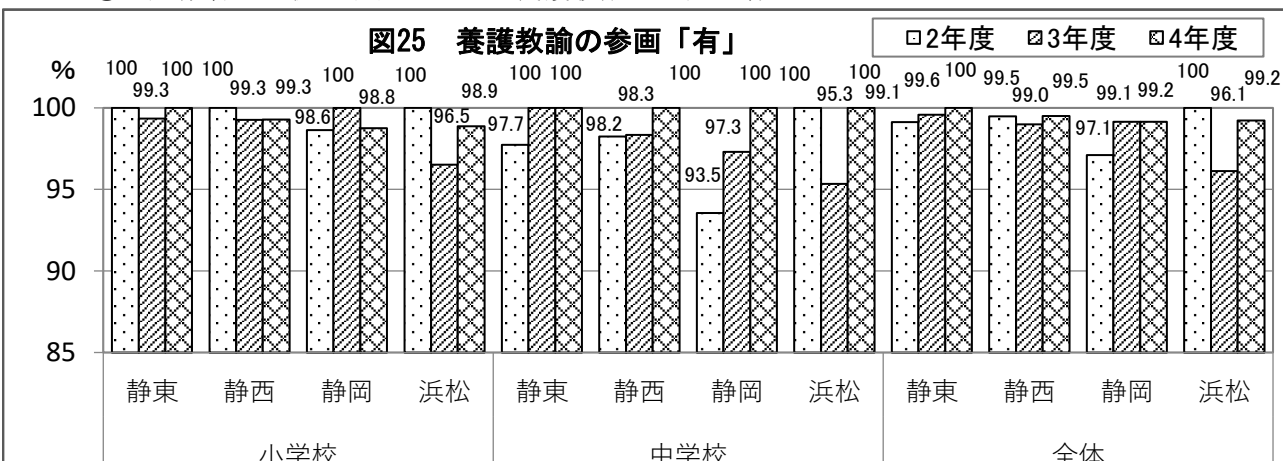
(1) 危機管理に関する校内研修の実態

① 危機管理に関する校内研修の取組の有無



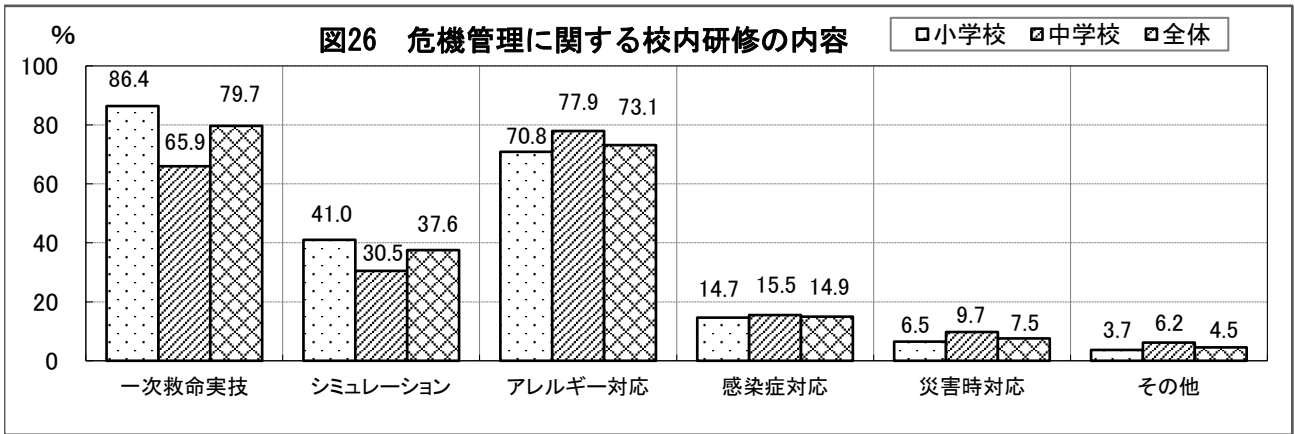
小・中学校共に、すべての地区で82%以上となっており、小学校は中学校より高い割合で校内研修が実施されている。＜図24＞

② 危機管理の校内研修における養護教諭の参画の有無



多くの学校で、養護教諭が中心または一員として危機管理研修に参画している。＜図25＞

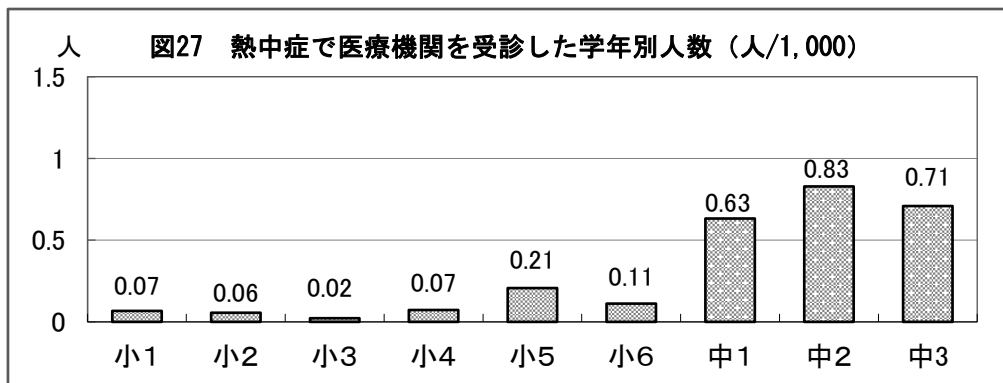
③ 危機管理に関する校内研修の内容



小学校では「一次救命実技」、中学校では「アレルギー対応」に関する研修が最も多い。〈図26〉

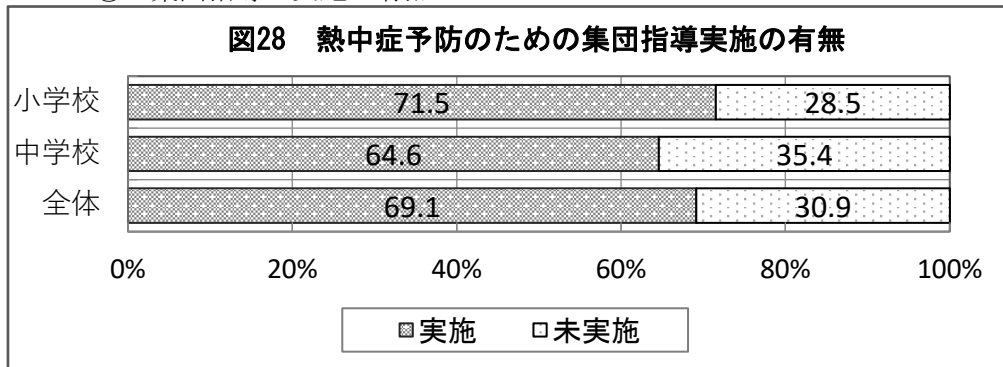
(2) 熱中症とその予防に関する実態

① 熱中症で医療機関を受診した学年別人数



小学生に比べ、中学生の受診人数が圧倒的に多い。〈図27〉

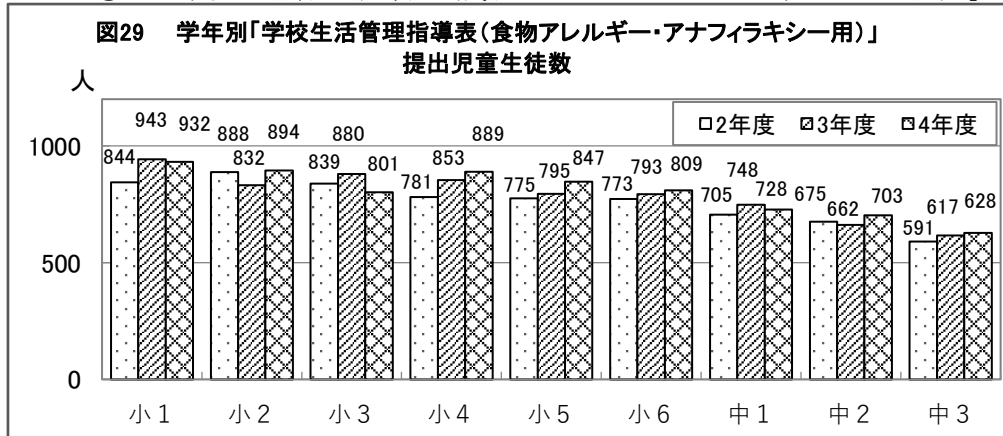
② 集団指導の実施の有無



全体で69%以上の学校が熱中症予防のために集団指導を行っている。〈図28〉

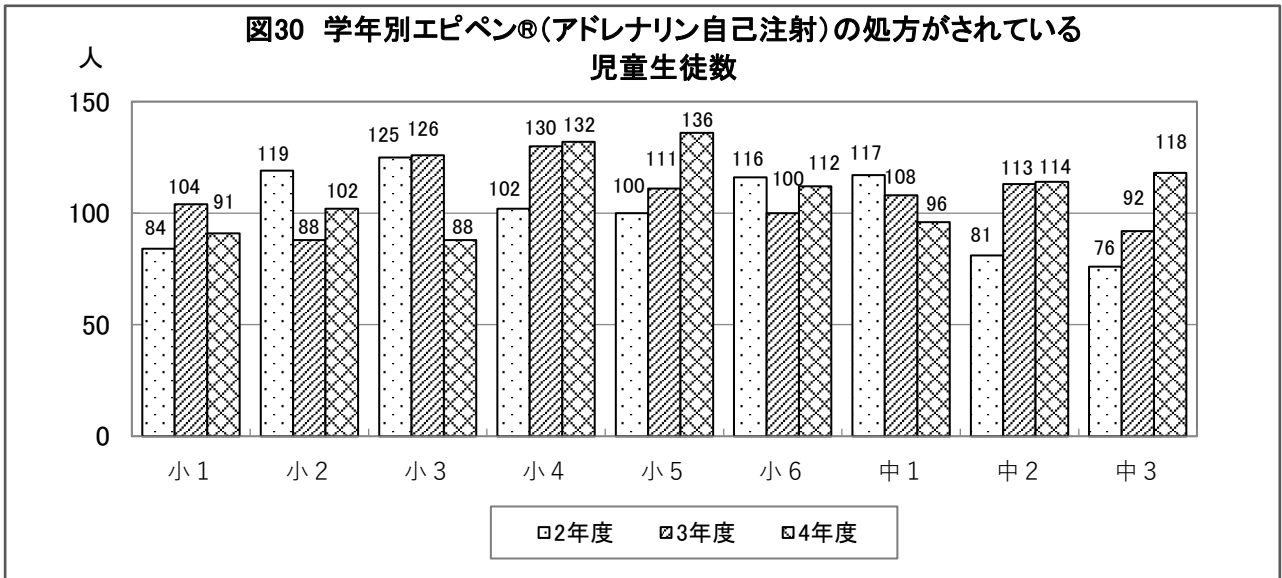
(3) 食物アレルギーに関する状況

① 「学校生活管理指導表(食物アレルギー・アナフィラキシー用)」提出児童生徒数



提出者数は、中学校よりも小学校の方が多い。〈図29〉

② エピペン®の処方されている児童生徒数



エピペン® (アドレナリン自己注射) が処方されている児童生徒数は、小学校では5年生が多く、中学校では3年生が多い。<図30>

第3章 個人基本調査

1 複数配置・資質の向上に関する調査

(1) 複数配置

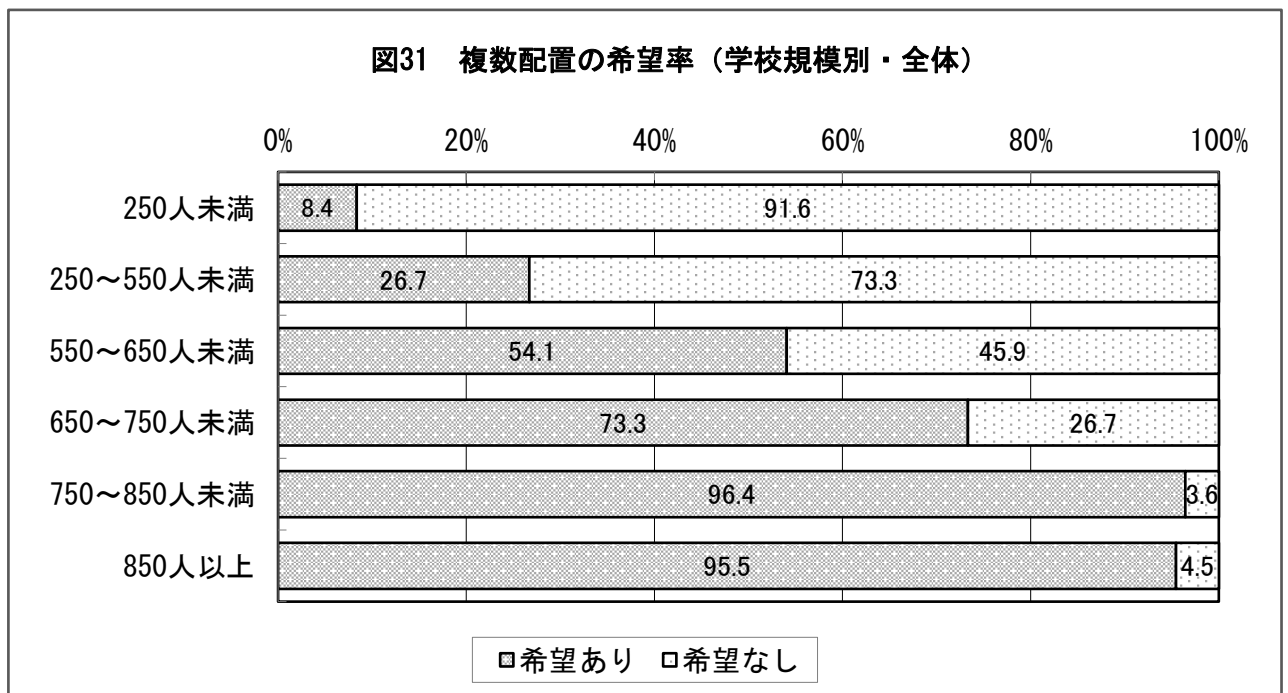
① 複数配置校数の推移

表3 年度別複数配置校

単位:校

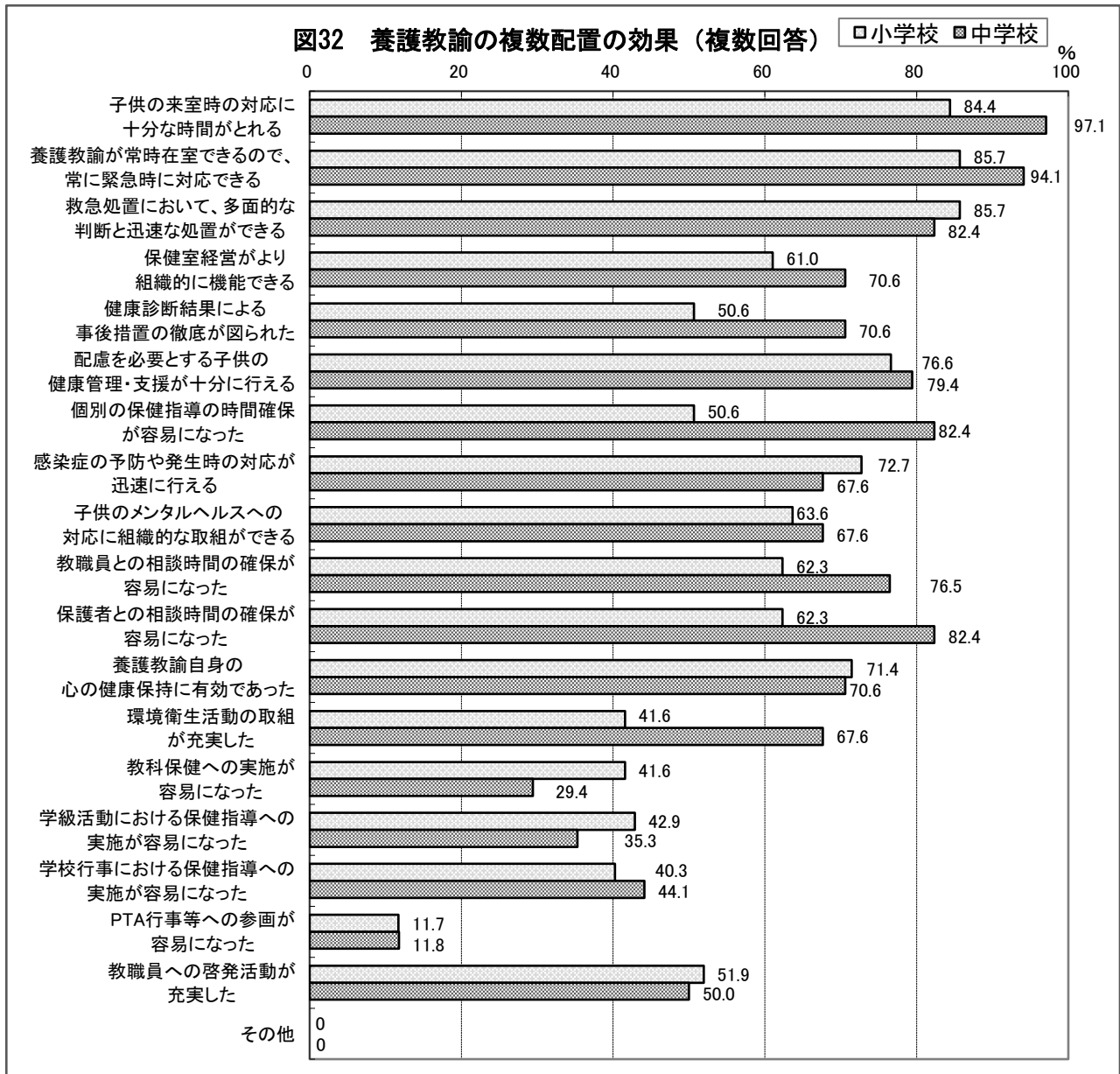
年度	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
校数	35	35	35	35	38	42	43	38

② 複数配置の希望状況 (学校規模別・全体)



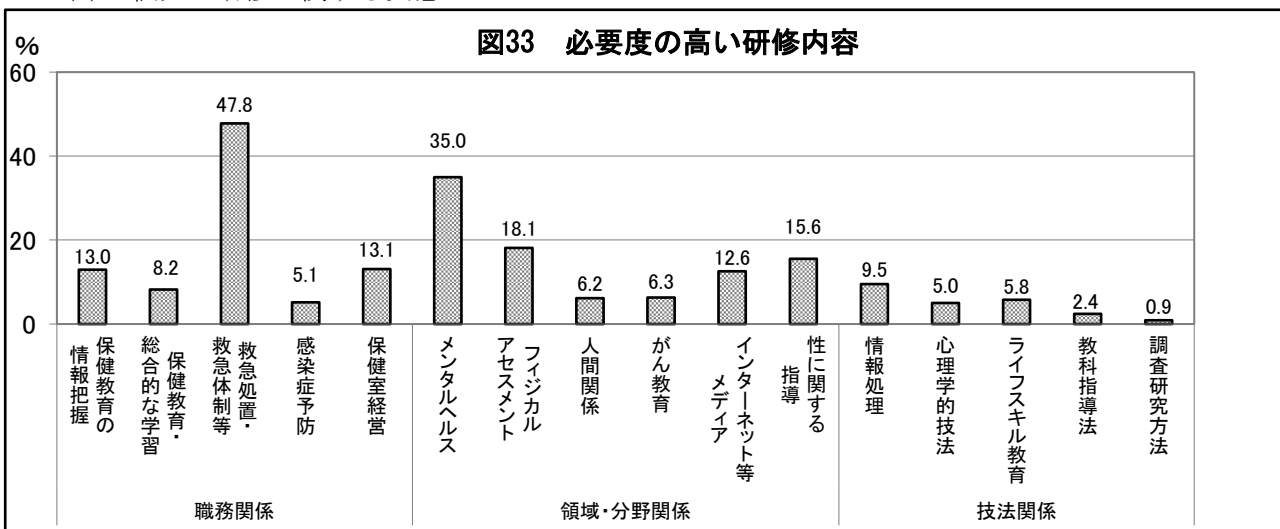
児童生徒数が多いほど、複数配置の希望率が高くなっている。750人を超えると希望率も95%を超える。<図31>

③ 養護教諭の複数配置の効果



「来室時の対応に十分な時間がとれる」「常に緊急時に対応できる」等の回答が多かった。 <図32>

(2) 個人の研修に関する実態



各項目で必要度の最も高い研修内容は、職務関係では「救急処置・救急体制等」、領域・分野関係では「メンタルヘルス」、技法関係では「情報処理」だった。 <図33>